

No. J2323

共同研究

「東アジアにおける米軍基地の連関・周辺都市形成に関する学際的研究」

立命館大学衣笠総合研究機構 助教
成田 千尋

本研究の目的は、冷戦期の東アジアにおける米軍基地群（特に沖縄及び韓国、それらと密接に関わりのある日本の基地）の形成の歴史的な変遷や米軍基地周辺の空間形成について、異なる分野の日韓の研究者の共同研究により、比較・相関という見地から明らかにすることである。2年目となる2023年度は、共同研究者が各自のテーマに沿って個別研究を実施・成果を発表するとともに、2023年8月に韓国での共同現地調査を行い、2024年2月にシンポジウムを開催した。

現地調査では、前年度の沖縄での調査との対比を念頭に置き、仁川、ソウル、平澤、東豆川、議政府、梅香里などでフィールドワーク及び聞き取りを行った。現在は2000年代以降の在韓米軍再編により、以前は北朝鮮との国境付近や首都圏にあった米軍基地が平澤地域と大邱・釜山地域に集約されつつあるため、訪問した多くの場所で基地の閉鎖・跡地利用が進んでいたが、米軍が日常的に活動している一部の地域の状況は沖縄と類似した点が多かった。全体として、①日本軍基地が在韓米軍基地に転用された場所が多く、現地でも米軍基地の前史として語られていること、②米軍基地が活用されている地域では、生活への悪影響という共通の課題を背景に、沖縄との連帯がみられることが確認できた。

その後、2年間の活動のまとめとして、2024年2月に高麗大学で「東アジア米軍基地の拡張と連携」と題したシンポジウムを開催した。ここでは東アジアの米軍基地と地域社会に関する歴史研究の現状と、共同研究の可能性についての基調講演と、①朝鮮国連軍に対する日本・沖縄の役割の変化、②韓国、沖縄などを例としたベトナム戦争時期の米軍の対外政策における連携と分化、③1960年代後半の朝鮮半島の安保危機と「沖縄核密約」との関連性及びその意義についての発表及び討論と総評が行われた。これにより、一国を超えた東アジアを対象地域とする本研究の意義が確認された一方、概念、方法論的な課題も見つかったため、今後はこれを念頭においてさらに研究を進める所存である。